

大久保の歴史

大久保の歴史は江戸時代から明らかです。昔の大久保村は大きな窪地で今の四谷三光町の花園神社裏から始まり、新田裏く元大久保車庫く東大久保低地く戸山ハイツく高田町く穴八幡下く早稲田大学を通過して神田川まで続き、きれいな小川が流れていました。

低地には水田がひらけ、その西の高台(西大久保町、百人町)には幕府の下級武士の住まいがありました。百人町は旗本も含め百人組が住んでいた組屋敷があり、寛永時代に鉄砲打場がつくられ、大矢場、小矢場と呼ばれ、武士達は平時鉄砲打の練習をしていました。そのかたわら、つつじ作りの内職をしていたようです。土質もあつたせいか、いつのまにかつつじの名所となり、下町の人達も見物にきて大へん賑わったそうです。明治十六年に町内の有志が昔に戻そうとつつじを七十種、一万株を植え、再び賑わいをとり戻しました。その後、目比谷公園ができると大部分が移され、あとは一面の住宅地になりました。

■新宿区のおゆみの中の大久保

明治元年(一八六八)九月二日、東京府庁が設置され、新市政の開始となった。新政府は当面の課題として、幕藩体制を支えていた土地制度を解体しなければならぬ。寺社領は境内以外の土地はすべて上場させた。当然、武家地、寺社地の多かった新宿区内はまったくさびれてしまった。

その特徴的なことは多くの陸軍施設が設置されたことで旧武家地の転用である。尾張徳川家の下屋敷の戸山山荘跡(現戸山ハイツ)に陸軍兵学寮戸山出張所が開かれ、戦術、射撃、体操剣術の三科をつくり、構内に軍楽学校を併置した。

内藤町の信州高遠城主内藤氏の屋敷跡地(新宿御苑)は、明治五年、大蔵省が買収して農業修学所を設置して、農業、牧畜、養蚕の研究にあたった。このように

新政府は国内外ともに一刻も早く近代国家としての体制を整えなければならなかった。

国家財政の規模の貧弱であった当時にとつて、中央にこのような大藩邸が利用を待つ状態であったことは、誠に幸運だったといえる。

新宿区域内は山の手に位置し、東京の住宅地として発展を示しており、地理的にみても大工業地帯とはなりえなかった。明治十八年二月一日、山手線の前身である日本鉄道株式会社の品川線が赤羽―品川間に開通して新宿駅が開業した。

ついで二十二年四月十一日、中央線の前身である甲武鉄道株式会社の甲武線が新宿―立川間に開通した。甲武鉄道が新宿区域内に及ぼした影響は大きく、交通の発達で原料、商品の輸送を円滑にして新宿駅が貨物の集積所としての役割を果たすようになっていくのは少し先のこと